

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成21年8月号

平成二十一年八月一日発行 第十九巻第八号 通巻第二二八号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



吉祥坐きつしやうざ

高橋将夫

守宮見て必ず思ふ蝶蝮かな  
いつの世も弓矢離さぬ武者人形  
浮かんでは濁世の空気吸ふ緋鯉  
京人形竹人形も端午かな

はるかなる記憶の中の天瓜粉  
先見えてきて梅雨茸の出るはでは  
夏霧を吸うて全てが見えてきし  
大日の吉祥坐なる夏の山  
炎昼やすぐに引つ込む鳩時計  
要所ではひねりも入れる夏燕  
片陰の次の片陰まで長し

「俳句研究」夏の号より三句

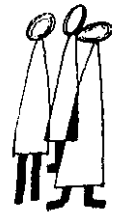
# 槐安集

水野恒彦

すかんぽやどこかへ帰りたき日暮  
陽炎の翼にわれはよろめきぬ  
やはらかな未明の墓地にシネリヤ  
天上にちちはは水上にあめんぼう  
形而上学的に水芭蕉ひらく

延広禎一

祝「真髓」上梓  
白扇に真髓の二字天動す  
楠の太き影あり夏神楽  
山繭のもぬけの中の虚空かな  
金婚の蓬を摘んでをりにけり  
杖と言はずステッキと言ひ夏野かな



加藤みき

花零る榭の方へ歩み寄る  
雨煙る闇に三光鳥のこゑ  
玉砂利は黒潮の贈青葉闇  
梅雨晴間わが影くきとか黒かり  
杜若ててかむ虫のそこらぢゆう

石脇みはる

すつとぼけ貌で出できし墓  
山法師谷の湿気のここちよし  
花空木ぐるり明るくなりけり  
心身の解き放たれし芭蕉はや  
藤の房百には百の動きあり

中島陽華

ヒマラヤの青き罌粟咲きぼんのくぼ  
夏安居の筆酔ひ覚めのボレロかな  
鯨音は三井やまつ赤な罌粟咲ける  
天心の鵜寺のおぼろかな  
墓蛙出でし寿限無寿限無と鳴いてをる

竹内悦子

葉桜となりたる空のさやぎかな  
草餅やふんばつてゐる足の指  
荒れ土の玉葱畑の姫女苑  
老木のいのちの先の花槐  
大いなる地球の窪み蝌蚪生るる

栗栖恵通子

青嵐や真言の数珠ばらけをる  
羊水の揺れの覚えや夏の月  
遠雷のししむらここに大悟せり  
白南風や軍艦巻をふたつほど  
藤蔓をなぞつてゐたる蛇身かな

大島翠木

葱坊主モナリザだとて老ゆるなり  
私はどこへゆくのか竹落葉  
喪服丈ながく吊るすや麦の秋  
よろこんで掃き寄せらるる竹落葉  
永劫の途中日光黄菅かな

雨村敏子

父がゐて母ゐる景色夏蓬  
心太余分なものはなかりけり  
芍薬の心なかなかに見えざりき  
父が家の裏の音なり岩清水  
十葉を刈りたる夜の湯の匂ひ

小形さとる

笹粽となりの山の雲を見て  
胡瓜揉みすこし揉ませてもらひけり  
朝虹にいちばん遠い人と居る  
もづく蟹生きてをるやら死んだやら  
合ねぶり飲の木トコロデワタシダレデスカ

本多俊子

青苔や硯に天のしづかなる  
新緑にたましひ濡れてしまひけり  
花は葉に石の胎内くぐりかな  
春落葉日本海へと水流る  
めぐり来るものにつつまれ更衣

久津見風牛

山藤にたどりつきたる風に会ふ  
剪定の指図の目玉動きけり  
麦秋の匂ふ軀を運ぶかな  
沙羅の花漠よりきたるおくり人  
蝮かも知れぬ動きを跨ぎけり

近藤 きくえ

笈摺の背に翹やすめ天道虫  
気温二十度杉の穂と白き余花  
口笛のをりふし近く夏野かな  
水音かすか緑あふるる中に佇つ  
少年の回 転 倒 立 雲 の 峰

近藤 喜子

枇杷の種とり出し母を取り出しぬ  
煩惱の身を低くして水芭蕉  
黒揚羽時空を超えて来たるかな  
人の虚を埋めたる青葉木菟の声  
雪溪や貴婦人に似し木のありぬ

谷村 幸子

枇杷うるる芭蕉生家の午後にをり  
閑宿に薄茶一ぷく白菖蒲  
朱の門くぐれば緑かぶさり来  
ななかまどに芽生えありけり津軽晴  
身構へて忍者屋敷や踊子草

瀬川 公馨

のどぐろやよからぬ咄いろいろと  
葉ごみより焔フレンと出でたる皐月かな  
だまらつしやい湯引きしてをる鯛の皮  
吝ん坊の櫟の花の髭かな  
畳鯛のやうなる暇夏のいろ

# 槐市集

江島照美

寝むられぬ夜の卯の花腐しかな  
レース地に透ける素肌の蠱惑かな  
更衣襟割り広き服仕舞ふ  
見上げれば桐咲きてをり帰り道  
筍の苞十本を抱きかかへ

金澤明子

麦秋の早刈迷路子等遊ぶ  
岩越しに湧水引ける花山葵  
摘み山葵・焼味噌添へる茶粥かな  
筑紫野の清水に生るビールかな  
母の日の花の香運ぶ市電かな

貴志尚子

継ぎ接ぎのジーンズなりし夏の山  
天窓のなくて卯の花明りかな  
風止めば風に絡みぬ卯月浪  
水面に水流れをり夏来る  
金亀虫杜に出で入りしてゐたる

久保東海司

間を置いて軋む水車や鳶の笛  
蛤の目覚め口より泡を吐く  
囀りや鏡のうちの山を拭く  
篝火に鞆繩のもつれほぐしやる  
木の芽和夫婦に広き夜の卓





# 槐集

## 高橋将夫選

トマト植糸ナス植えてホモ・サピエンス 枚方 中野 京子

真つ向に受くる天命海芋咲く

梅花藻の水の世に咲き水に散り

身ほとりのばらばらほぐれ滝しづき

新樹林この世を脱ける道なりし

豆 蓮 根 筍 西 瓜 隠 元 忌

白玉の凹みに母のころかな

緑立つ釜いつばいに飯炊いて

白昼夢 螢袋の揺れてゐる

葛練の泡どうしても消せざりし

松の花実生の月日ありにけり

今朝の雨昨日の晴れや若緑

供華散華鋭き声をほととぎす

切つ先の空へ空へと菖蒲かな

潮引いてどつと出で来し望潮

青嵐白隠の達磨にまみえたり 枚方 近藤 紀子

さざめきは若葉の中の峙より

金平糖の角まるくなる春愁

春疾風心の澱の流れゆく

五月闇の奥を覗かず帰りたり

巢つばめのとぶ決断のなき一羽 大阪 久保東海司

袋もて振ればささやく花の種

花筏棹さす程の流れなし

事ここに至りて浅蜷蓋を閉ず

風鈴を吊り聞法の座ごしらへ

少年の秘密の谷間草苺 守口 柳川 晋

飯の世に馴染んでしまふ今年竹

メビウスの帯一ト捻り茅の輪越ゆ

パリー祭散売り投げ売り見切り売り

梅雨入風催告状の如く来る

# 銀河往来 高橋将夫

梅花藻の水の世に咲き水に散り 中野 京子

この世に人の世があれば、水の世という視点もあって不思議はない。例えば、梅花藻の生きる世界は水の世だとう。水の世に咲き、水に散る。「人の世」が人から見た世界なら、「水の世」は梅花藻から見た世界。それにしても、「水の世」とはまことに美しい言葉。

葛練の泡どうしても消せざりし 富松 寛子

慌てて作った葛湯に葛の小さな粒が残った思い出がある。葛湯はなめらかでなくてはいけないのだ。掲句では葛練りに泡が入り込んでいるという。瓊末を詠んでいるのではない。気になるが、どうしようもないもどかしさを分かってほしい。

松の花実生の月日ありにけり 岩下 芳子

実生とは草木が接木や挿し木によらずに、種子から芽を出して生長すること。松の花を見て実生の月日を想う作者に、作者が送ってきた実直な人生が重なって見えてくるようだ。

金平糖の角まるくなる春愁 近藤 紀子

角があるから金平糖。その角がなくなつては金平糖でなくなつてしまう。でも、なくなつたからといって、何ほどのこともなかろう。春愁とはそんなものなのだろう。

風鈴を吊り聞法の座ごしらへ 久保東海司

仏法を聴聞するまことにありがたく、おごそかな会場。風鈴を吊つてそんな厳肅な席の準備が完了した。画竜点睛とはこのことかもしれない。

仮の世に馴染んでしまふ今年竹 柳川 晋

若竹の真つ直ぐに立つさまは実にはすがすがしい。そのまま真つ直ぐに伸びて行ってほしいものだが、なかなかそうもいかないらしい。あまり早々と仮の世に馴染んでほしくはないと思うのだが。

晦せをうけて摘みたる蛇苺 西村 純太

危ないから止めた方がよさそうだが、どうやら作者は蛇苺を摘んでしまったようだ。でも、未だに元気でいるところをみると、取り越し苦労だったらしい。むしろ、蛇苺でない方がこわいのかもしれない。

日の満ちるエデンの園に佛桑花 竹中 一花

エデンの園に日のさす平和な時があつて不思議はない。そこに佛桑花が咲いていても、これまた不思議はない。にもかかわらず、エデンの園と佛桑花のギャップはやはり不思議。

暮鳴いてぼつと日暮のシャンデリア 松原 伸子

暮が鳴く日暮に灯るシャンデリア。「ぼつと」はオノマトペとしては月並みだが、シャンデリアが煌びやかなだけに、効果は抜群。〈蚯蚓鳴く六波羅密寺しんのやみ 茅舎〉とは対照的で、これまた一つの世界。(以下略)